

令和 2 年 9 月 12 日現在

機関番号：82619

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13573

研究課題名（和文）フェニキア人の「出現」- 考古資料から見た初期の交易活動と対外進出

研究課題名（英文）The Early Phoenicians: An Archaeological Study on their Commercial Activities and Impacts on Neighbouring Regions

研究代表者

小野塚 拓造 (Onozuka, Takuzo)

独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸研究部・研究員

研究者番号：90736167

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：フェニキア人の足跡を跡付けていくことは、地中海世界の古代史を理解するための重要な課題といえる。本研究では、その出発点（初期鉄器時代、前12～前10世紀頃）に注目し、のちに「フェニキア人」と呼ばれるようになる人々の文化や交易活動、周辺地域への影響について、考古資料からせまるものである。先行研究や発掘報告書のデータに加え、レヘシュ遺跡やゼロール遺跡の初期鉄器時代層の出土物を新たに整理して分析することで、上記のテーマを考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、初期のフェニキア人に関連づけられる文化に多様性があったこと、フェニキア人と近隣地域とのつながりは、当初は限定的であったが、前10世紀以降、特に前8世紀頃に拡大した可能性があることを指摘することができた。

前12世紀以降の地中海東岸地域に「出現」し、その後の歴史に影響を及ぼした諸集団のうち、フェニキア人についての研究はこれまで手薄であった。本研究は、初期のフェニキアの動向について具体的に考察できた点で、学術的に意義のあるものとなった。

研究成果の概要（英文）：Tracing the Phoenician footsteps is an important issue to figure out the history of the ancient Mediterranean world. This study focused on the early Iron Age people who would become known as “Phoenicians,” and considered their cultural traits, commercial activities, and impacts on their neighbouring regions, based on previous archaeological studies as well as newly processed finds from Tel Zeror and Tel Rehesh.

研究分野：考古学

キーワード：フェニキア 鉄器時代 古代東地中海 土器 胎土分析 テル・ゼロール テル・レヘシュ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) フェニキア史の重要性

フェニキアとは、現在のレバノンからイスラエル北部にかけての沿岸地域を示す地域名である。フェニキアの人々は紀元前 11 世紀頃から海洋交易を活発化させ、後に、カルタゴをはじめとする植民都市を地中海の各地に建設し、数百年にわたり繁栄する。フェニキア人の躍進鍵となったのが、活発な海洋交易と対外進出(植民市建設など)である。これらが、どのように始まり、どのように発展し、どのような影響を後世に与えたのかを解明することは、古代地中海世界の歴史を理解する上で重要な課題の一つである。

(2) 問題の所在

フェニキアの人々による海洋交易や対外進出の歴史をあとづけていく中で、最初に問題となるのが、その出発点がはっきりしていないことである。後に「フェニキア人」と呼ばれることになる人々が「出現」したのは前 12～前 11 世紀頃と推測されるが、この時期のフェニキア地域の都市の活動実態については、未だベールに包まれている。近年、イスラエルのドル遺跡の発掘調査成果に基づいた研究が進展しているものの、全体として、考古資料、歴史史料ともに限りがあり、具体的な研究事例も不足している。

2. 研究の目的

本研究は、フェニキア人躍進の原動力となった海洋交易と対外進出活動がどのように始まったのかという問題をあつかった。研究の目的は、(1)当時の海洋交易にどのような特徴があったのかを検討すること、(2)この時期のフェニキアの人々と周辺地域の町々との間にあったであろう接触や、その影響について解明することである。

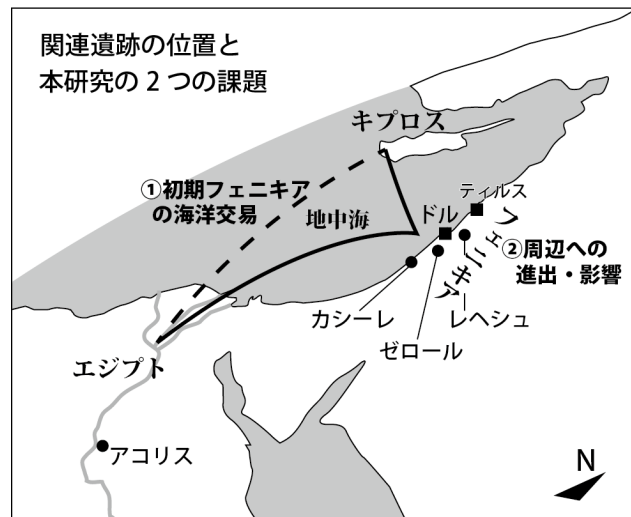
3. 研究の方法

(1) 初期の海洋交易についての検討

初期フェニキアに関連するとされる遺跡(特にドル、ケイサン、ティルスなど)の発掘報告書や概報を収集し検討することで、初期フェニキアの集落に特徴的な物質文化のパターン、交易に用いられていた土器の特徴などを確認した。同時に、フェニキア地域にもたらされたエジプトやキプロスからの搬入品について検討を加えた。次に、フェニキア地域から遠方に運ばれた土器についての出土事例を、カシーレ遺跡などの近隣地域、エジプトやキプロスなどの離れた地域を視野に入れて収集し、検討した。

(2) 周辺地域との接触

カシーレ遺跡では、進出してきたフェニキアの人々が居住した街区があったと考えられている。こうした事例を、別の遺跡においても検証することで、フェニキアの人々と周辺地域との接触や、初期フェニキアの文化的・経済的影響の広がりなどを考察した。特に、1960年代に日本の調査団によって発掘調査が行われたゼロール遺跡や、現在も調査が実施されているレヘシュ遺跡の出土土器を整理して検討することができた。土器の分析は、型式と胎土の特徴を組み合わせた視点から検討し、製作地と移動、模倣、集団の進出といった事柄の考察を試みた。



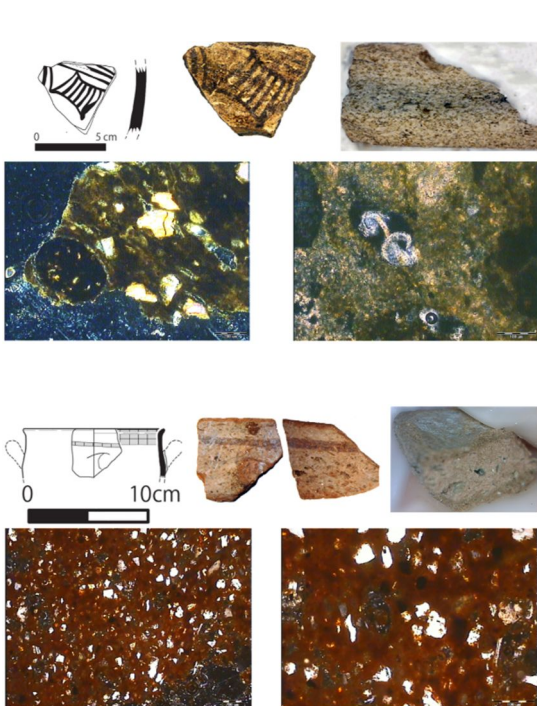
4. 研究成果

(1) 初期フェニキアの物質文化と海洋交易

研究期間全体を通して、フェニキア人の初期の居住地とされる諸遺跡で確認された物質文化について、自身で実見した資料と、出版された発掘報告書のデータから検討を加えた。その結果、「初期フェニキア」として一括りにできる物質文化のパターンは簡単には見出しにくく、交易活動も集落ごとに多様であった可能性を指摘できた。

(2) ゼロール遺跡出土資料の検討

ゼロール遺跡の出土遺物を整理し、前 13 世紀から前 10 世紀頃までの各層に属する土器の様相を明らかにした。その中に、ドルやケイサンといったフェニキア地域の遺跡で確認された特徴的な土器群が含まれていることを明らかにした。一方で、偏光顕微鏡による胎土の観察からは、それらの多くがゼロール周辺や、さらに南の地域で製作されたもので、フェニキア地域からの搬入品は僅かであることが判明した。また、エジプトやキプロスからの搬入土器は見出すことができなかった。ゼロール遺跡は、フェニキア都市のドルの勢力圏に属した集落と目されていたが、フェニキア地域とのモノの介した接触やつながりは、想定よりも乏しかったと考えられる。



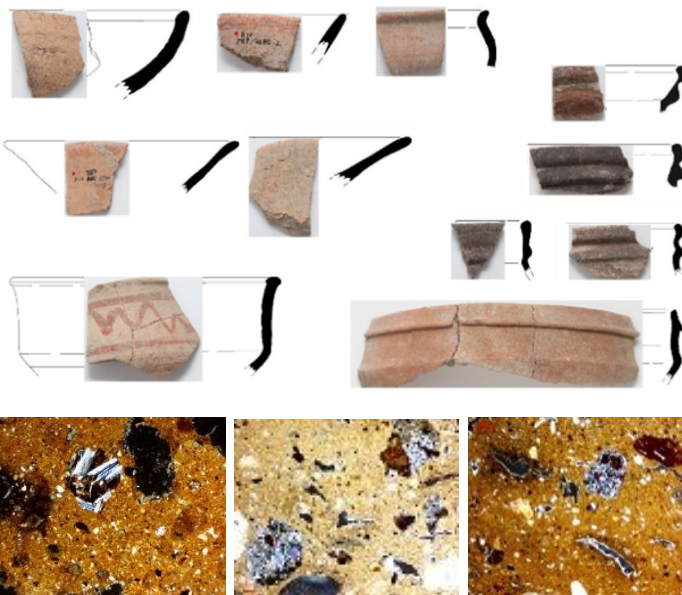
ゼロール遺跡で出土した土器片。フェニキア地域でも類似した土器が出土している。偏光顕微鏡で胎土を観察すると、フェニキア製でないことが分かる。



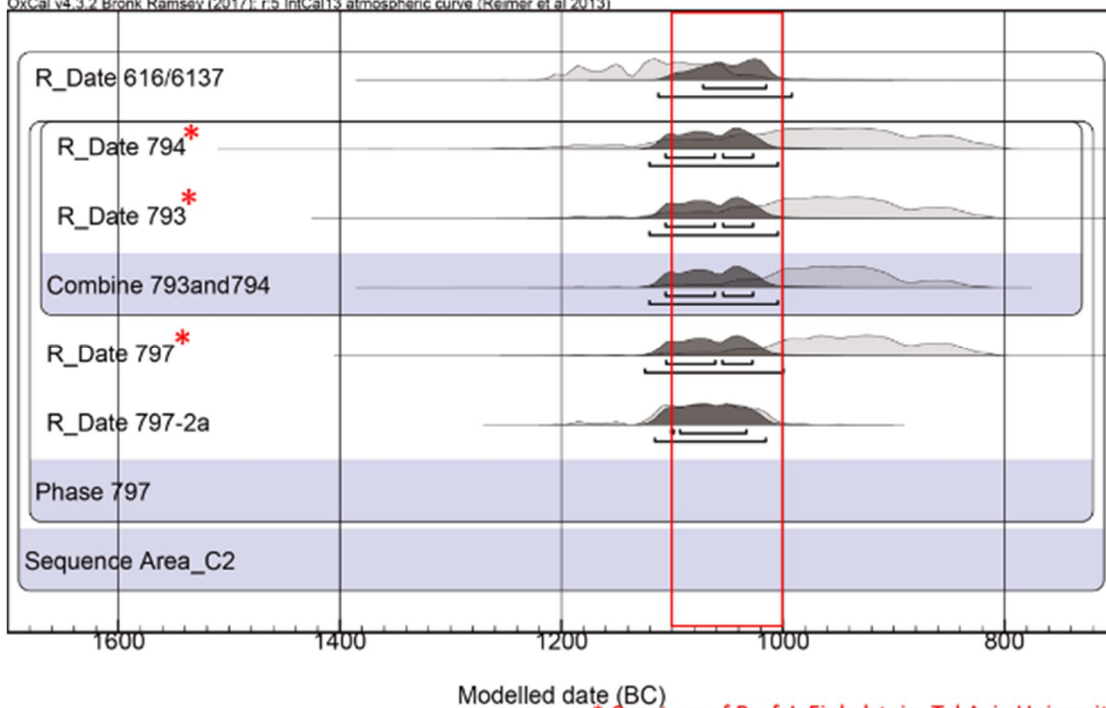
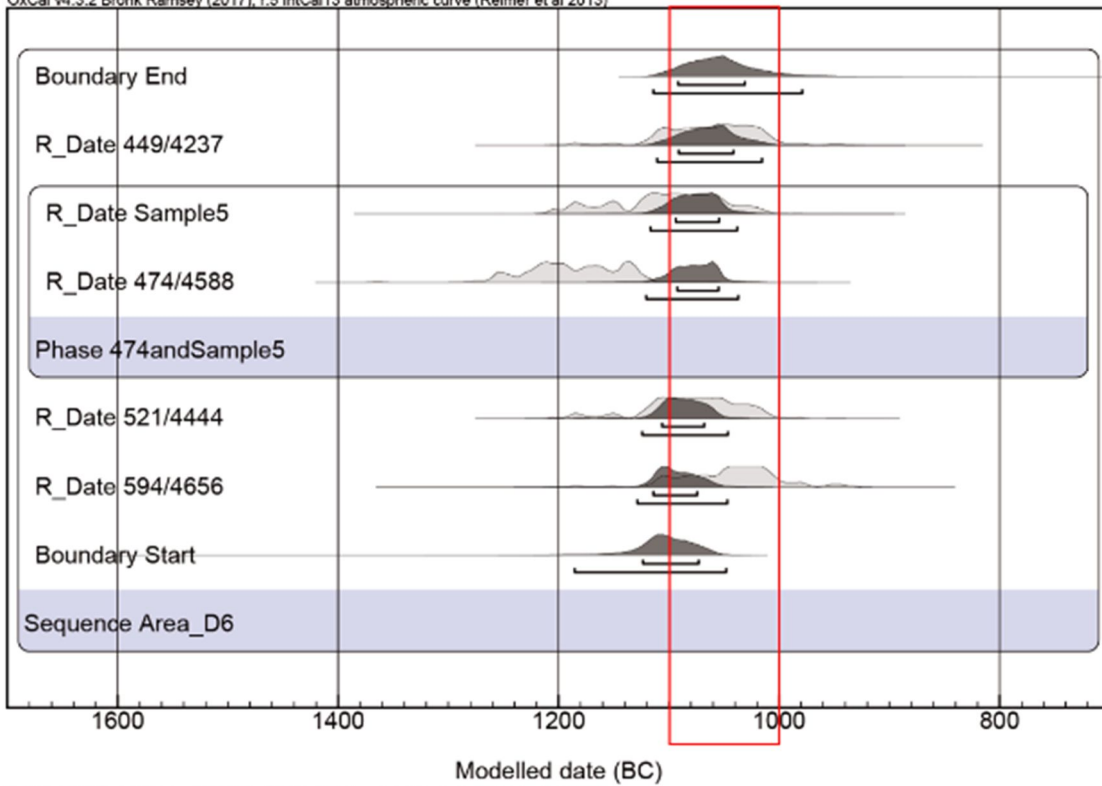
ゼロール遺跡出土資料の一部。フェニキア地域やキプロスからの搬入品は予想に反して少数であった。

(3) レヘシュ遺跡出土資料の検討

レヘシュ遺跡の出土遺物を整理し、紀元前13世紀から紀元前8世紀までの各層位の土器組成の様相を明らかにした。さらに、同遺跡のD地区とC地区の良好な層位関係の中で検出された炭化種子類の放射性炭素年代測定を、東京大学総合研究博物館の大森貴之氏と共同で実施し、初期鉄器時代の指標となっているドルやメギドといった遺跡との、より厳密な相対編年を整備した。この時代のレヘシュ遺跡は、居住面積やセトルメントパターンの傾向から、地域の中核的な集落であったと目され、沿岸部とヨルダン渓谷を結ぶ交易路の付近に立地している。そのため、フェニキアの人々が交易活動を活発化させ、周辺地域との接触が密になれば、その影響が同遺跡の物質文化にも表れることが予想された。ところが、同遺跡の初期鉄器時代層からは、フェニキア地域との直接的なつながりを示す交易品を確認することができなかった。一部でフェニキアの交易壺の模倣品とも考えられる土器が出土しているが、胎土を観察した結果、隣接するエズレル平野からもたらされたものである可能性を指摘することができた。レヘシュ遺跡周辺では、フェニキアの影響を受けた土器は製作されていなかったようである。同遺跡の初期鉄器時代の出土資料を検討した結果、初期フェニキアの人々と内陸地域との接触や、それに伴う文化的影響の広がりを確認することができなかった。他方、レヘシュ遺跡の主に前9世紀～前8世紀に年代づけられる居住層の出土物の整理と把握に努めたところ、同遺跡では前8世紀になって、エーゲ海、シリア、レバノンなど広範な地域に由来する搬入品が顕在化することが明らかになった。本研究からは、フェニキアと近隣地域、特に内陸地域と接触は、しばらく限定的であったが、前8世紀頃から急激に拡大したという可能性を提示することができる。



レヘシュ遺跡で出土した前12世紀頃の土器片と、同遺跡周辺で製作されたと考えられる土器の胎土。特徴的な玄武岩粒が混じる。



* Courtesy of Prof. I. Finkelstein, Tel Aviv University

レヘシュ遺跡のC地区とD地区の層位の較正年代
整理・分析した初期鉄器時代の土器片の多くは、
放射性炭素年代測定によれば、前11世紀頃に年代づけられる。

(4) まとめ

初期フェニキアの諸都市に見られる海洋交易の痕跡は、ドル遺跡、ケイサン遺跡、カシーレ遺跡で傾向が異なっており、前12世紀～前11世紀頃の交易活動は一様でなかったと考えられる。また、フェニキア地域と内陸地域との経済的・文化的接触は、初期の段階では限定的であったと結論づけられる。また、フェニキアの交易活動が活発化し、周辺地域への影響が強まるのは紀元前10世紀以降であったと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 1件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 津本英利・小野塚拓造	4. 巻 141
2. 論文標題 聖書考古学の焦点	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 季刊考古学	6. 最初と最後の頁 95-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hasegawa, S., Hashimoto H., Tsumoto H. and T. Onozuka	4. 巻 2
2. 論文標題 The Excavations at Tel Rekhesh, Israel: The Results of 2013-2017 Seasons	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Proceedings of the 11th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East	6. 最初と最後の頁 115-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件／うち国際学会 4件）

1. 発表者名 S. Hasegawa, H. Hashimoto, H. Tsumoto, and T. Onozuka
2. 発表標題 The excavations at Tel Rekhesh, Israel: The results of 2013-2017 seasons
3. 学会等名 11th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tel Rekhesh in the Iron Age I: An Aspect of Iron Age Demography in the Eastern Galilee
2. 発表標題 Takuzo Onozuka and Hisao Kuwabara
3. 学会等名 2018 Annual Meeting, American Schools of Oriental Research (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 T. Onozuka
2. 発表標題 Breaking a Negative Cycle: Ancient Egyptian Collections in Japan and their Future
3. 学会等名 CIPEG Annual Meeting as part of the 25th ICOM General Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hasegawa, S. and T. Onozuka
2. 発表標題 Tel Rekhes during the Late Bronze and the Early Iron Ages and its Historical Context
3. 学会等名 The Jezreel Valley in the LB-Iron IIA in context (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小野塚拓造
2. 発表標題 南レヴァントから見た3.2kaイベントと古代地中海世界の大転換期
3. 学会等名 日本西アジア考古学会公開シンポジウム「気候変動と古代西アジア - 古気候から探る文化・文明の興亡」(招待講演)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

西アジア考古学会のYoutubeチャンネルを通じた調査成果紹介「アナハラの歴史解明に向けて イスラエル、テル・レヘシュ第1 2次発掘調査」
<https://www.youtube.com/watch?v=hXyzngAXviA>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----